

学生海外調査研究	
18 世紀初頭 スコットランド・ジェントリの史料調査	
河内山 朝子	比較社会文化学専攻
期間	2009 年 6 月 27 日～2009 年 7 月 16 日
場所	エディンバラ スコットランド, UK
施設	スコットランド公文書館、スコットランド図書館

内容報告

1. はじめに

18 世紀半ば以降、スコットランドでは、政策ではなく土地所有者層の個人的な活動が、新たな産業に適応した村落建設を目覚しく展開させたとされる¹。しかし、そのような土地所有者たちが村落建設に着手する少し以前の時期について、土地所有者層の実体を論じた研究は少ないと言える。そのため、17 世紀後半から 18 世紀初頭のスコットランド土地所有者層が持っていたネットワーク、そしてそれが持つ政治的な意味、中央との関係について注目することを博士論文の目標としている。

この関心の前提として、修士論文で扱った一地方の大規模借地農反乱が存在するが、今回の調査ではそれは扱わない。今回は、その反乱の際に、それを書簡で詳細に報告した一人のスコットランド東部低地地方出身のジェントリ²について調査する。この人物自身は、土地所有家系に所属しているが相続権を持たない次男以下であり、土地所有者ではない。しかし、彼の残した書簡群全体に書かれていることを見ると、その時期の土地所有家系に属する者がかかわった特徴的な出来事のいくつか、より現実的に伝えられていることがわかる。そこで、この人物の残したそれらの記録から当時の土地所有者層の実体を知ることができるのではないかということを考えた。今回の調査では、この史料の価値を探ることを目的とした。

具体的な方法としては、1) この人物の書簡群の調査、2) この人物とその背景を知るために必要な補完史料と文献の調査、3) この書簡に書かれている出来事を理解するために必要な補完史料と文献の調査、以上 3 点である。

2. 調査の実践

2.1 スコットランド国立公文書館の調査

2.1.1 ジェイムズ・クラークの書簡

1724 年にスコットランド南西部、ギャロウェイで

起こった大規模借地農反乱の第一史料とみなされているのは、スコットランド東部低地地方、ペニクック出身のジェイムズ・クラークという地方官吏の書いた 5 通の書簡である。彼は、同時代的にも知名度の高かった土地所有者家系、ペニクックのクラーク家の息子の一人であり、クラーク家の跡取り息子である法律家、政治家、改良家、古物蒐集家サー・ジョン・クラークの弟であった³。ジェイムズは、自らの生業を模索する中で父や長兄に書簡を送った。彼は、父や長兄のネットワークを頼りにオランダやイングランドを行き来し、1723 年にギャロウェイの地方徴税官となった。彼はそこで反乱を目撃し、その様子を長兄に報告した。

このジェイムズ・クラークの書き残した書簡は、全体では 1715 年 12 月から 1730 年 2 月までのおよそ 14 年間、主に長兄サー・ジョンに宛てて書かれた 69 通が存在する。それはスコットランド国立公文書館(National Archives of Scotland)所蔵のクラーク家文書(Papers of Clerk family of Penicuik, Midlothian)全 6181 点中の 1 ファイル GD18/5288 としてまとまって残っている。

東部低地地方のクラーク家出身のジェイムズが、何故南西部のギャロウェイで反乱を目撃することになったのかを知るために、書簡群全体を通して見てみると、当初、彼は商人修行を試みるためにオランダやロンドンを行き来していたが、ロンドンにおいて株式投機で挫折し、その後、長兄サー・ジョンの紹介でギャロウェイの地方徴税官になったことがわかる。書簡群全体をみると、反乱はもとより、クラーク家の資金と人脈を支えにしながら彼が経験した商取引、投機と挫折、そして地方徴税官としての職務遂行の様子が、その時代背景と一致していることがわかる。

この書簡群以外のジェイムズの記録物は見当たらない。したがって、GD18/5288 はジェイムズの書き残した唯一の史料と言える。

2.1.2 ジェイムズ・クラークに関する史料

ジェイムズ・クラークがサー・ジョン・クラークの弟であり、1724 年の借地農反乱に関する書簡をサー・ジョンに送ったことは既に知られているが、彼の生涯や人物像について述べられた文献はみあたらない。長兄であるサー・ジョンの回想録ではクラーク家の家族構成員について言及されている箇所があるが、ジェイムズに関する言及はとりわけ少ないこともわかっている⁴。そのため、クラーク家文書内でジェイムズ・クラークに関する史料を調査した。

前に述べたように、彼自身が書き残した記録物は、スコットランド国立公文書館所蔵の 1 ファイル、69 通の書簡だけであることがわかった。そこで、クラーク家文書において、ジェイムズ・クラークの経歴を知るために必要な補完史料の調査を行った。その結果、何点かの補完史料があることがわかった。

一つは、彼の父であるサー・ジョンによって書かれた子どもたちに関する記録が存在することである。けれども、これは現在この文書群の持ち主であるクラーク家が保管しており、文書館での閲覧はできないことがわかった。

二つめは、父サー・ジョンと長兄ジョンがやり取りした書簡における、ジェイムズについての言及である。目録をみると、クラーク家では家長、あるいは家長を継ぐ長兄が、家族構成員の生活に配慮して資金や人脈の援助を行っていたことがわかる。ジェイムズの場合、投機に関わっていた時期があり、そのことについての言及がサー・ジョン父子の書簡中にあることがわかった。

三つめは、クラーク家と関係を持つ土地所有者の書簡における、ジェイムズについての言及である。前述のとおり、クラーク家家長、あるいは長兄による家族構成員に対する人脈支援は、ジェイムズにも与えられていた。それは商取引、投機、そして地方徴税官の職務遂行を助けるためにジェイムズに紹介された。ジェイムズに紹介されたこれらの人々は、ジェイムズに対する援助経過を家長や長兄に報告することがあり、その書簡がいくつか残っていることがわかった。

最後に、地方徴税官だったジェイムズの同僚から長兄サー・ジョンに宛てられた、ジェイムズの危篤・死亡報告書簡が存在することもわかった。

以上のように、ジェイムズ・クラークの生涯と人物像を知るための補完史料が、クラーク家文書内にいくつか存在することが確認できた。

2.1.3 ジェイムズ・クラーク書簡に登場する人物たち

ジェイムズ・クラークの書簡では、ジェイムズの活動にかかわった人々の名前が見られ、その数は 40 名を超える。それは、クラーク家が関係を持つ爵位貴族層から土地所有者層、土地所有家系に属する者たち、商人たち、船長に及ぶ。このうち、もっとも多いのは土地所有者層である。

爵位貴族たちは、父サー・ジョンと長兄サー・ジョンの議会におけるつながりと姻戚関係に由来する人物やクラーク家と親しいバロン、そしてジェイムズが投機を通じて知り合った人物などである。土地所有者たちはもっとも多く登場し、クラーク家と関係がある爵位貴族の縁戚者たちも含まれている。彼らは商取引、投機、そして地方官吏の職務といった、ジェイムズが経験したすべての場面に登場する。土地所有家系に属する者たちは、クラーク家と関係がある土地所有者層の子息たちも含まれており、商業と地方官吏の場面に登場する。

商人たちは、ジェイムズが商業や投機的话题を出すたびに登場する。彼らは、その拠点をアムステルダムやロンドン、そして新大陸に置いており、ジェイムズはそこでの商人修行を希望したり、彼らの拠点に滞在させてもらったりしていることがわかった。船長は、そのようなジェイムズの船荷を運ぶ船の持ち主であることもわかった。

2.2 スコットランド国立図書館の調査

2.2.1 スコットランド土地所有者層の来歴

ジェイムズ・クラークの書簡には、ジェイムズの活動にかかわって多くの土地所有者層が登場する。そこで、スコットランドの下級爵位貴族と土地所有者層の来歴を知るための文献を調査したところ、次の 2 つが有用であることがわかった。

1) *The Baronage of Scotland*: containing an historical and genealogical account of the gentry of that kingdom: collected from the public records and cartularies of this country; the records and private writings of families; and the works of our best historians. / By Sir Robert Douglas of Glenbervie, Baronet. Illustrated with engravings of the coats of arms (Edinburgh, 1798).

2) Mosley, Charles eds., *Burke's Peerage, Baronetage & Knightage*: Clan Chiefs Scottish Feudal Barons 107th Edition (Delaware, 2003).

2.2.2 Caledonian Mercury 紙

ジェイムズ・クラークの書簡に書かれている出来事を理解するために必要な補完史料のひとつとして、同時代の新聞がある。今回の調査では、ジェイムズの書簡の中で一番多く言及されていた 1720 年の投機に関することを中心に、この新聞の内容を確認した。

1720 年 4 月創刊のカレドニアン・マーキュリー (Caledonian Mercury) 紙は、およそ 2-3 日毎のペースで発行されており、各 6 ページほどである。他社の記事の転載と投書で構成されている紙面には、国王の動向、戦況、宗教問題、そして貨幣経済の動向に関することが記載されている。

1720 年の記事では、ジェイムズがかかわった投機について、株価の推移からその背景、風評まで、多くの紙幅が割かれていることがわかった。1 年分の関

係記事を読むことで、ジェイムズの書簡において説明されている彼の経験との比較が可能になると思われる。

2.2.3 スコットランド土地所有者層の既存研究

国立公文書館のアーキヴィストの見解では、スコットランドにおいて、スコットランド土地所有者層の研究は比較的マイナーな研究であるとのことであった。実際、スコットランド土地所有者層の既存研究は、議会合同やナショナリズムに関係するものに比べると数が少ないと言える。そこで、国立図書館ではスコットランド土地所有者層研究文献を調査した。

その結果、確かに議会合同やナショナリズムに関する文献が多いが、それらのテーマを探索していくと、そこにスコットランド土地所有者層の性質の変容がかかわっているということを示唆するような研究も多く存在することがわかった。

また、スコットランド土地所有者層の変容自体をテーマにした研究も1990年代から現われ始めているように思われた。たとえば、それまでは大きな枠組みで捉えられていなかった人々を明確に「スコティッシュ・エリート」としてテーマを掲げているものが現れ始める。ただし、その対象とされている地域は限定されている。このことは史料の制約とも関係していることもうかがわれるが、今後、研究を進めていく意義がある分野であると考えられる。

3. おわりに

今回の調査は、ジェイムズ・クラークという土地所有家系に属するジェントリが書いた書簡群の史料価値を探ることを目的とした。その結果、書簡群それ自体は、時代背景を反映している興味深い史料であることがわかった。また、ほぼ無名と言えるこの人物の生涯と人物像を知るための補完史料が、いくつかが存在することがわかった。そして、この書簡に書かれている出来事を理解するための補完史料として、同時代の新聞などが存在することがわかった。しかし、既存研究という点では、その数が少なく、これからの分野であることが推測された。

今回の調査結果は、まずは史料紹介としてまとめ、投稿できればと考えている。

注

1. Mitchison, Rosalind, *Lordship to patronage Scotland 1603-1745* (1983); Lynch, Michael, *Scotland: a New History* (1992); Whyte, I.D., *Scotland Before the Industrial Revolution: An Economic and Social History*,

c.1050 - c.1750 (1995); Lynch, Michael ed., *The Oxford Companion to Scottish History* (2001).

2. 今回の調査で偶然お会いすることができた Burke's *Peerage, Baronetage & Knightage* (2003) の執筆者の一人であるヒュー・ベスケット氏によれば、クラン（氏族）というカテゴリーが存在するスコットランドにおいて、「ジェントリ」を厳密に定義することは難しいとのことだった。ここでは、土地所有者であっても爵位貴族は爵位貴族とし、それ以外で土地に依拠して生活する者を土地所有者層とし、土地に依拠しない法曹や官吏などの上位ミドルリング・ソートをジェントリとする。
3. *The Baronage of Scotland* containing an historical and genealogical account of the gentry of that kingdom: collected from the public records and cartularies of this country; the records and private writings of families; and the works of our best historians. / By Sir Robert Douglas of Glenbervie, Baronet. Illustrated with engravings of the coats of arms (Edinburgh, 1798). 420-423; H.C.G. Matthew/Brian Harrison eds., *Oxford Dictionary of National Biography*, vol.12, in Association with The British Academy: From the Earliest Times to the Year 2000 (New York, 2004), 48-49.
4. Prevost, W.A.J. ed., "Letters Reporting the Rising of the Levellers in 1724", *The Transactions of the Dumfriesshire and Galloway Natural History and Antiquarian Society*, 3-44 (1967), 198, n19; サー・ジョン・クラークの回想録でジェイムズに関する言及が確認できるのは、ほんの数行である (Clerk, Sir John, *Memoirs of the Life of Sir John Clerk of Penicuik, Baronet, Baron of the Exchequer Extracted by Himself from His own Journals 1676-1755*, ed. John M. Gray (Edinburgh, 1892), 111.).

参考文献

- Brown, Iain Gordon, *The Clerk of Penicuik: Portraits of Taste & Talent* (Edinburgh, 1987).
- Marshall, Gordon, *Presbyteries and Profits: Calvinism and the Development of Capitalism in Scotland, 1560-1707* (Oxford/New York, 1980) (大西晴樹 (訳) 1996『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神: スコットランドにおけるウェーバー・テーゼの検証』 すぐ書房) .
- Williams, J. Lloyd, "The Import of Art: the Taste for Northern European goods in Scotland in the Seventeenth Century", Roding, Juliette/Lex Heerma van Voss eds., *The North Sea and Culture (1550-1800)* (Uitgeverij Verloren, 1996).